

最 後 の 試 合

—— 友情の深め方に迫る取組み ——

- (1) 主題名 友情の尊さ [2 - (3)] 関連項目 [4 - (1)]
 (2) ねらい 友情の尊さを理解して心から信頼できる友だちをもち、互いに励まし合い、高め合おうとする意欲を養う。
 (3) 資料名 「最後の試合」
 (4) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点
導 入	1 自分の部活動を振り返る。	これまでの部活動の中で、一番うれしかったことは何ですか。	気持ちをリラックスさせる。 本時の学習に興味・関心・意欲をもたせる。
展 開	2 資料前半を読む。 3 健二の気持ちを考える。	2 アウトランナー 1, 2 塁の状況で、バッターボックスに入るときの健二は、どんな気持ちだっただろう。 ・アウトになったらどうしよう ・絶対に打っていやる アウトになったとき、健二はどんな気持ちだっただろう。 ・申し訳ない ・大輔になんと言おうか	回想場面であることを理解させる。 大輔に打順を回すことを必死で考えている健二の気持ちを押さえる。 (大輔の心情を尋ねる発問を工夫してもよい) 大輔に申し訳なく思う気持ちの理由を引き出す。 <u>前半については、短時間で終え、後半に重点を置く。</u>
	4 資料後半を読む。 5 「友情の深め方」について考える。	大輔が「口に出しては、味気ない」と言ったが、友情を深めるためには、「口に出す」方がよいのだろうか、それとも「口に出さない」方がよいのだろうか。 ・口に出して言わないと伝わらない ・口に出さない方がカッコいい 二人は互いの思いを聞いて、相手をどのように思っただろう。 ・以前より信頼感が増した ・友情が深まったと思う	それぞれの立場の意見を尊重し、理由をしっかりと聞く。 相手を思いやる気持ちに変わりはないが、友情を深めるためにはどうすべきかを考えさせ、友情を育てようという意欲をもたせる。 互いが人間としての弱い部分まで受け容れることで深く理解し合えたことを押さえる。
終 末	6 教師の説話を聞く。	・先生は、いい友たちをもっていてうらやましいな。 ・先生も、友だちづくりで苦労しているんだな。	教師自身の体験としてどのように「友情」を深めてきたか、あるいは、深められなかったかじっくりと語る。

「最後の試合」

【前半】

「よお！久しぶり」

私が大輔たちと会うのは十年ぶりです。今日は、野球部の顧問であった石田先生が還暦を迎え、退職されるといので、みんなでお祝いをしようと久々に集まったのです。

「先生ももう還暦なんだなあ。先生も若かったのに、みんな歳をとるはずだなあ。」

「おい、健二。おまえも白髪がでてきたなあ。足も速かったし、守備もうまかったのに、少しは野球をやっているのか？」

などと、会話が弾んでいきました。でも、私には今でも心の痛むできごとがあつて、その話題にはならないよう心の中で願っていました。

今から二十年前の夏。私は、第四中学校野球部のキャプテンでした。チームメイトからの信頼もあつたようで、これまでチームのために一生懸命に頑張ってきたつもりでした。いよいよ私たち三年生にとって、中学校生活最後の大会になる市選手権大会が近づき、みんな練習に熱が入っていたのを覚えています。

大会前日の練習後、私は三年生全員を集めてミーティングを行いました。

「いよいよ明日、僕たちにとって最後の大会だ。これまで、惜しいところで負けてしまい一度も優勝できなかった僕たちだから、この大会では、三年生みんなの力を結集して、是非とも優勝しようぜ。」と、この大会にかける思いを伝えました。この私の言葉を聞いて、みんなの気持ちもさらに盛り上がっていったようでした。

ミーティングを終え、家に帰りながら明日の試合のことを考えていた私は、ふと大輔のことが気になりました。

健二にとって大輔は、幼なじみで小学校からいつも同じクラスの仲の良い友だちでした。家も近所で家族ぐるみでキャンプに行ったり、旅行に行ったりして、まるで兄弟のようでした。中学校でも同じ野球部に入って、これまで一緒に苦しい練習に耐えてきました。しかし、大輔は運動があまり得意ではなく、決して野球も上手とはいえません。そのために、これまでの試合には一度も出場したことがなかったのです。

でも私は、部活が終わって帰宅したあと、ランニングしたり、素振りをしたりする大輔の姿を何度も見てきました。健二はそういうことは誰にも言わずに、試合の時に、道具の準備をしたり、みんなに声をかけたりとチームの裏方として、みんなのために頑張っていました。私はそんな大輔の姿が思い出され、「明日は、大輔も試合に出してやりたい。」「そして、三年生みんなが優勝したい。」「という強い思いを持ったのです。

試合前日の夜、私は大輔に電話をかけ、

「明日の試合には、出場させてもらえるように、顧問の石田先生に僕からも頼んでみる。大輔のバツティングは僕よりうまいんだもんな。代打で出られるときは必ずあるよ。もしチャンスが回ってきたら、代打でホームランを打ってくれよ。大輔にはその力があるよ。そのときは必ず先生にいうからな。僕はベンチに座って動かないぞ、大輔を出してくれなかったらな。」と一気にしゃべりました。

それを聞いて、大輔は、

「健二、ありがとう。そこまで気をつかってくれて……。健二だから言うけど、僕も本当は一回でもいいから公式戦でヒットを打ちたかったんだ。でも僕は試合に出られなくてもみんなと一緒に野球ができればそれでいいんだという気持ちもある。健二、電話をくれてありがとう。とてもうれしかったよ。」と答えたのです。

市選手権大会の朝、試合会場に集まった三年生の顔は、みんなやる気に満ちあふれて生き生きしていました。初戦の相手は、優勝候補の第五中学校です。みんな気合いを入れて試合に臨みました。

しかし、残念ながら、今日も先発メンバーの中には、大輔の名前はありませんでした。

試合は、初回到私のなんでもないミスから第五中学校に一点を奪われてしまい、一対〇のまま終盤をむかえ苦しい展開でした。大輔は、いつも通りみんなを元気づけるために、ベンチから大きな声をかけています。

そして最終回、敗色濃厚の第四中学校に最後のチャンスが巡ってきました。ニアウトから死球と安打でランナー・二塁となったのです。そして次のバッターは私でした。

「自分のミスのせいで試合に負けたら、みんなに申し訳ない。この打席でなんとか取り返さなければ・・・。」と意気込んでバッターボックスに向かおうとした時、石田監督が、

「おい、健二。おまえが回してくれたら、おまえの次に大輔を代打で出すからな。大輔、バットを振っておけ！」

「はい！」

と、大輔は今まで見たこともないような真剣な顔で、ベンチから飛び出していきました。

私はバッターボックスでかまえながら、

「よし、チームのためにも、大輔のためにも、絶対につないでやる！」と、念じたのです。

「ストライク！バッターアウト！ 集合！」

試合終了のコールが響いた時、私はネクストバッターボックスにいる大輔を見ることができませんでした。私が顔を上げた時、大輔はまだネクストバッターボックスの中で呆然とグラウンドを見つめているのです。その後、私は大輔に謝ろうとしたのですが、黙ってうなだれている大輔の姿を見ると、とても声をかけることができませんでした。次の日も、次の日も・・・次第に、私は「あれは野球の中の出来事だ。勝負の世界の厳しさなんだ。大輔だって分かっているさ。最後のバッターになって、泣きたいのは俺の方さ。」と自分自身に言いかけようになりました。大輔とは、すぐに普段の仲のいい関係に戻りました。やがて二人は笑顔で中学校を巣立ったのです。

大輔とは、卒業まで仲良く過ごしました。でも一度もこのことに触れることはありませんでした。まるでお互いが避けるように。

でも今日こそは大輔に一言でも謝ろう。そう決意した私は、

「なあ、大輔。二十年前の最後のバッターボックスなあ・・・。」と切り出しました。

すると大輔は、私の言葉をさえぎるように、

「そのことは言うなよ。今にして思えばいい思い出じゃないか。口に出しては、味気ない、味気ない」と、自分の口をふさぐようなジェスチャーで応えたのです。

【後半】

しばらくの沈黙ののち、私はやはり、思い切ってもう一度切り出しました。

「あのとき、お前に回せなかったことを謝ろうというんじゃないだよ。実は、あのとき、俺はお前から逃げたんだ・・・。」私は、大輔にそのときのことを思い出しながらすべて語りました。すると、「そうだったのか・・・。実は、俺も健二に黙ってたことがあるんだ。謝るべきなのは俺のほうがもしれない。本当のことを言うとな・・・あの時、打順が俺に回ってこない方がいいとも思ってたんだよ。俺が最後のバッターになってたかもしれないし。最後のバッターに俺がなってしまうたら、がんばってきた健二やみんなに責められるかもしれないと思う気持ちもあったからドキドキしていたんだ。だから健二がアウトになって試合が終わった時、「ほっと」した気持ちもあったんだよ。ごめん健二・・・。」

その日、私は二十年ぶりに大ホームランを打ったような気持ちになっていました。

活用に生かすための実践報告

「最後の試合」

1 主題の設定

中学生の時期は、お互いに心を許しあえる友だちを真剣に求めるようになる時期といわれている。反面、感情の起伏が激しくなり、無批判に同調したり、傷つくのを恐れるあまり、一定の距離を保ったままの関係しか構築できないこともある。真の友情は、相互に変わらない信頼や敬愛の念があって成り立つものであり、互いに人間としての弱さをも含めて理解し合う関係の中で育まれるものであることを学ばせたい。対象となるのは、道徳性の発達が自分の好き嫌いや損得から進んで、周囲や社会のことが考えられはじめる第2学年から第3学年が適切であると考ええる。

2 指導過程の工夫

資料は20年ぶりの同窓会が開かれることから始まる。20年間、心の奥底にずっと引っかかっていた2人しか知らない約束。その場だけをやり過ごす気持ちではなかったが、約束を守れなかった自分、そのことをずっと言い出せなかった自分、しかし時の流れに助けられ、思い切って告白した自分。その友だちを思い続けたからこそその心情の変化を理解させたい。また、レギュラーとかそうでないとかの外見上の立場を越えてお互いを認め合い、尊敬している関係に着目させたい。そして最後には相手も同じように悩んでいたことをあらためて知ったとき、互いの友情が深い人間理解に支えられた満足感にも似た感情も理解させたい。

3 発問の工夫

導入部分においては、自分たちの部活動での体験を通して感じていることを率直に出させたい。部活動で辛かったり嫌だった体験を語るのは抵抗があると考えて、敢えてうれしかったことを尋ねた。展開では、前半の登場人物の心情部分は軽く触れるに留め、後半にしっかりと時間を確保することに努めた。

4 生徒の反応

やはり20年という空白期間やその間の経験、部活動という学級とは異なる集団のつながりの強さなど生徒の年齢や経験上、中学生の時期では役割取得が困難な生徒がいた。また「すぐに言えはいいよね」など携帯やメールなどで簡単に考えている気持ちの表現方法に終始する生徒や、「一生懸命した結果なのだから謝る必要はない」と達観視する生徒がいた。反面、相手を思いやる心から「言いたくても言えない」心情で20年間悩み続けたことや、それがために一層絆が深まったこと、また相手も同じように考えてくれていたことが分かったときの喜びを理解できた生徒もいた。

5 実践者からの一言

大輔の「口に出しては味気ない」のニュアンスが、はじめなかなか伝わりにくかった。友情のすばらしさを生徒は理解しているが、友情を継続させ、より一層深めることの大切や方法について学ぶことが大切だと感じる。

この資料は、私自身が野球部の監督として、多くの生徒を試合で使っていきたいとできないもどかしさを基に自主作成した。

(仁方中学校 石田孝夫)